すぐに　わかる　えびののこと
いっき　わかい　えびのんこっ

きょうまちふつかいち
京町二日市

－京町商店街のおこりと京町二日市の始まり－

平成２６年（２０１４）２月１日京町二日市の様子

えびの市歴史民俗資料館

目次

１．商店街はこうしてできた・・１

２．京町二日市のはじまり・・・４

３．京町二日市はどこであるの・８
（地図）

【1．商店街はこうしてできた】

人がいっぱいの二日市。
お店もたくさんです。
さて、この二日市が開かれた商店街は
どのようにしてできたのでしょうか。

江戸時代も終わりのころ、真幸・飯野・加久藤からは、鹿児島藩（薩摩藩）に年貢米（今の税金のようなもの）を納めるため鹿児島の加治木まで米を馬の背に積んで運んでいました。

しかし、運ぶ途中の道が険しくて馬が転落したり、盗賊が出没して年貢米が奪われてしまうことがありました。

そこで、藩庁（今の県庁のようなもの）にお願いして、年貢米を焼酎に代えてもらいました。

焼酎の工場が真幸や飯野にできて、鹿児島からたくさんの酒造り職人が来ました。

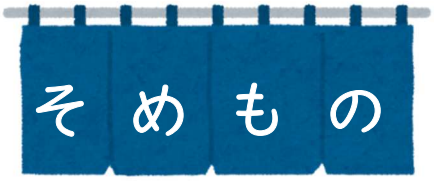
明治になり、「西南の役」の戦争により焼酎工場は火災に遭い、閉鎖されました。

酒造り職人は鹿児島に帰る人もいましたが、真幸に移り住んだ職人が酒造業や商売を始めたりして京町の商店街ができたということです。

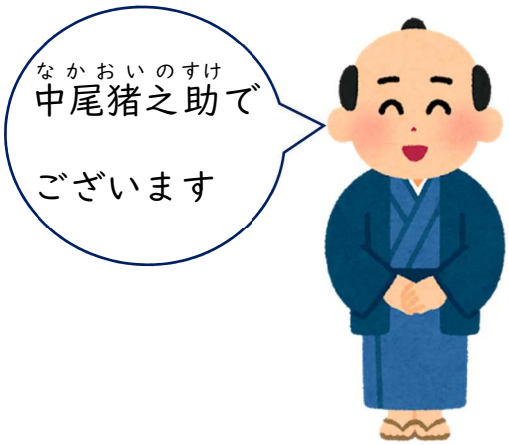
【２．京町二日市の始まり】

商店街はできましたが、京町二日市はどのようにして始まったのでしょうか

明治から大正にかけて「紺屋どん」と呼ばれる染物屋がありました。



この紺屋どんでは、新年（旧正月：２月の始め頃）を迎えるときに婦人たちが初染め（新年に初めて糸や布を染めること）をする習わしがあり、婦人たちは毎年誘い合って店を訪れていました。



店の人気は高まり、染め上がりを待つ婦人たちで、待合室はいつも満員でした。

これに目をつけた主人は、待合室の客に、染物のほか反物（着物を一着分仕立てる布地）や日用雑貨（生活に必要な品物）なども売ることを思いつきました。品物は飛ぶように売れました！

ほかの商売人たちも、染め上がりを待つ客に自分の品物を売るようになりました。

近所の焼酎醸造所の黒松徳太郎は、

焼酎の安売りを始めました。

毎年１月末日（旧正月前）

に焼酎の代金を集金して、

２月１日と２日を感謝の日としました。

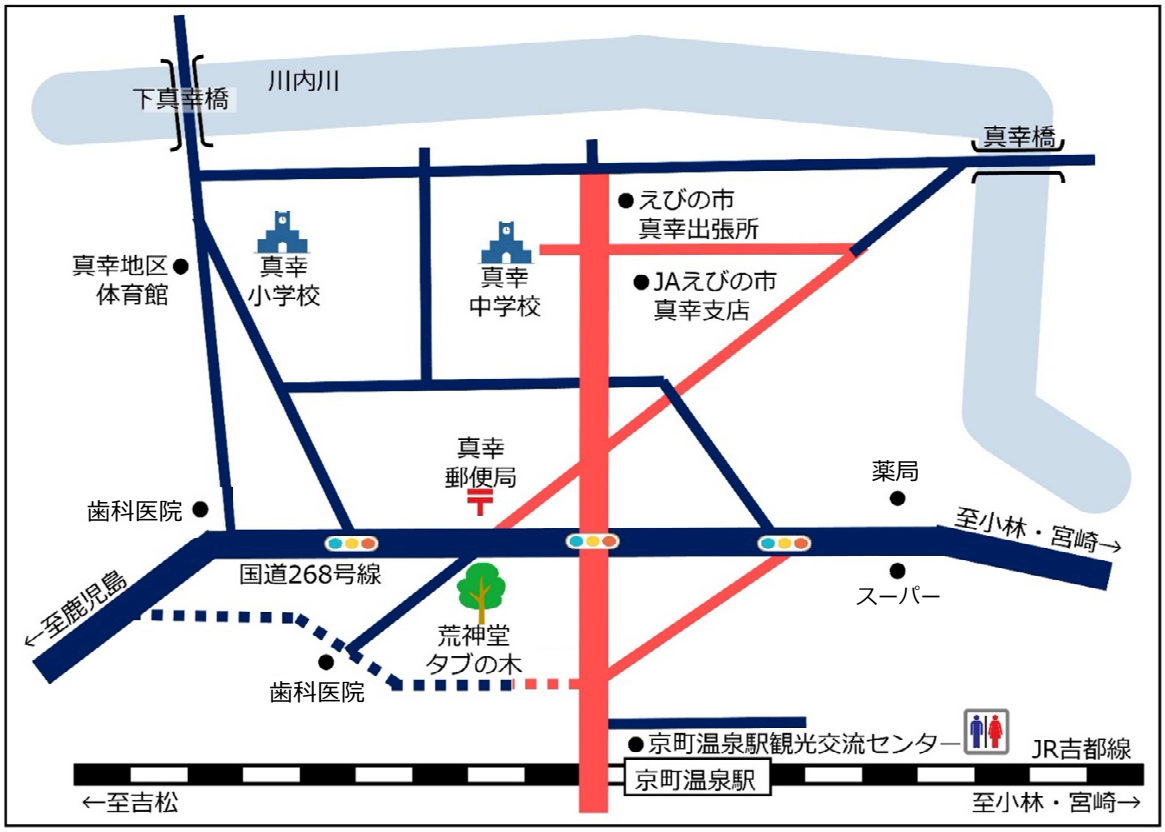
この日はお得意さんを招待し、焼酎を飲み放題にしてもてなし、とてもにぎわいました。

これを見た、同じ商店街の呉服屋・小間物屋・金物屋などの店が、この時期に合わせて競争して安売りを始めたので、町の外からも多くの客が商店街に来るようになり、ここに買い物市が誕生しました。

大正９年（１９２０年）に始まった京町二日市。以前は２月１日と２日に行われていましたが、今は２月の第一土曜日と日曜日に開かれています。また、道路も当時の商店街の道路ではなく、京町温泉駅前から約２kmが歩行者天国となり、約４００店もの店が並び、市内・市外・県外から１０～２０万人もの人が訪れる南九州で最大級の買物市となっています。

【３．京町二日市はどこであるの】

<京町温泉駅周辺マップ>



- 道路が赤の線は令和２年（２０２０年）京町二日市開催時、歩行者天国の場所。

- 道路が点の線は京町二日市が始まった頃（大正９年/１９２０年）、商店街があった場所。

＜豆知識＞
鹿児島三大市に「川辺二日市」「加治木の初市」「高尾野の中の市」があります。「川辺二日市」は「京町二日市」と同じ頃開催されるそうです。

＜参考文献＞

・著者：老連史編集委員会 編　書名：『**えびの市老人物語集**』　発行年：平成５年４月
発行者：老連史編集委員会　Ｐ２０８～２１２

・著者：えびの市史談会 編　書名『**えびの第２４号**』　発行年：平成２年４月
発行者：えびの市史談会　Ｐ１０３～１０４

・**ふるさと散歩№６４**（広報えびの平成１６年２月号）　発行者：えびの市

・**ふるさと散歩№８８**（広報えびの平成１８年２月号）　発行者：えびの市

・ウエブサイト　http://kyomachifutsukaichi.com（えびの市商工会）

昭和29年（1954）2月　京町二日市

発行/2021年5月

Facebook　Twitter

えびの市歴史民俗資料館

〒889－4311　宮崎県えびの市大字大明司２１４６－２　TEL/FAX　0984-35-3144